

蛇眠る八町二村の原発の避難地帯に雪降りつづく

天野明

二〇一一年の福島原発事故から六年目の冬。冬眠中の蛇も、降り積む雪も、表面的には何事もないかのようだが、蛇も雪も、いま現に被曝中なのである。事故後七年目を迎えて、「町埋めるごとく汚染土捨てらるる人住めぬ町猪群るる町」の一首ともども、原発事故による現在進行形の被曝をうたっている。重要な視点だと思ふ。

目蓋はそつと閉づべし不用意に力こもれば涙こぼる
古川典子

今月の六首はどれも心に沁みる。「選者ルーム」の谷岡亜紀の文章に、「登場人物を想像しつつ読むが、事情を知らない読者にも、作者の切実な思いは十分に伝わる」とある。その通りである。古川さんはご自身病身でありながら、小紋潤君の介護につくされている。なお、冒頭の「目蓋」、振り仮名はないが、「まなぶた」と四音で読むのだろう。

徳利を振ればちやぼんと囁いて仲間を一本呼べと云
犬飼亮介

牧水の時代からはじまり、戦後の太宰治・坂口安吾の時代からずっと続いていた文学と酒とが親戚つきあいだった時代が終わって、酒の短歌もずいぶん減ってきた。今月の「心の花」にも酒の歌は少ない。そんな中でのこの作、特に下旬がいい。

はらはらと悪口ばかり聞こえきぬあなたはきつと魅
岸並千珠子

短歌の現在

No.446 今月の15首を読む

佐佐木幸綱

軽く口ずさむブルースのような味わいが持ち味。ちよい悪男の魅力。特に下旬の、現代口語の軽さを活かした表現が楽しい。

緩まない蕾をつけて桜の枝内定持たぬ我に優しい

安野ゆり子

まだ蕾が固い桜。そんなにあせらなくても大丈夫だよ、と語りかけているかのようだ、というのだ。就職先が内定した友人たちがそろそろ多くなってきたころの大学生の作。過日の「大学短歌バトル」では、作者が司会をつとめていた。なかなかの名司会だった。

多摩川は春の装ひさよならを伝える準備をはじめ
二月 原尚美

日本では三月が、卒業の季節、転勤の季節等々、別れの季節ということになっている。ここは組織や機構との別れではなく、人や土地等とのわかれかもしれない。いずれにしても、別れの季節の空気を背景に春らしい明るい「さよなら」をうたって印象的。

受験から逃げにし我を嗤へるか十二歳どど校舎に
入る 大月閑

十二歳だから中学受験生らしい。自身の過去への感傷とは無関係に受験生たちが試験会場である教室に入ってくる。下旬「十二歳どど校舎に入る」が秀逸。

透明な小瓶に移す金平糖わつと目出度き色が溢る

中西由起子

愛誦性のある下旬が魅力的。なぜ金平糖に色がつけられるようになったのか知らないが、言われてみれば、目